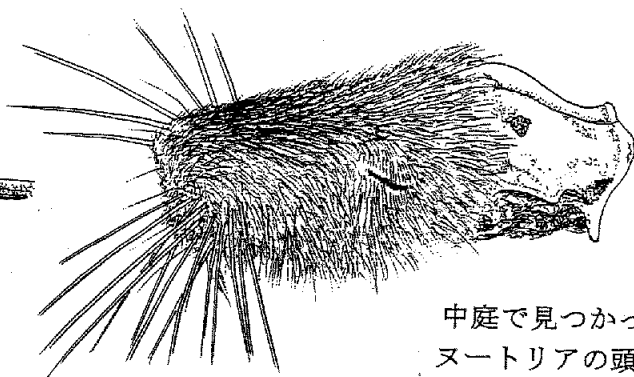


ヌートリア 沼狸
(ヌートリア科)
学名 *Myocastor coypus*
英名 Coypu



中庭で見つかった
ヌートリアの頭部

5月13日の午前、用務員さんが廊下から校長室に向かって叫ぶ声が聞こえた「中庭に動物の顔が落ちてます」この簡潔にして想像しにくい状況報告を受けて、私は困惑しつつもハヤル心を抑えながら現場へ急いだ。中庭の築山の斜面にそいつは「コロりん！」と落ちていた。なるほど「顔」である。しかし動物形態学的にはこれは頭部というべきものである。全体を覆う黒褐色及び黄土色の短い毛と、吻部（尖った鼻の部分です）の白く長い髭、側頭部についた眼などの特徴から、これはヌートリアの頭部であると思われる。昨夜死んだもののよう新鮮で、鼻やまぶたがびくびく動きそうである。いったい何があったのか？中庭の池にヌートリアは棲んでいないが、瀬戸川や鴻池など学校周辺の川や池に棲んでいることは確認されている。何者かがこれを食べたに違いないのだが、胴体部分が見つからないので、別の場所から頭部を運んできたと考えられる。以前から校内にアライグマはたびたび出没しているし、9日には中庭を横切るキツネが教頭先生に目撃されている（校内にキツネがうろついているのは驚きだ！）。また昨日の昼過ぎには中庭でカラスが激しく鳴きかわしていたという情報がある。どうもこのあたりを厳しく尋問すれば下手人が判明するかもしれないが、証拠がないので強制的な捜査はできない。

ヌートリアの頭部は顔面にほとんど傷がなく、閉じた目や白い毛の生えた鼻が愛らしい。頭頂部から後ろは皮膚がはぎとられ、白い頭骨が露出し、まだ赤い血や肉が付いている。裏返すと頭骨の底部は激しく噛みちぎられていて、下顎骨（下アゴですな）は一部しか残っていないように見える。「どうしますか」と聞かれたが、私の頭骨コレクションにヌートリアがなかったので、「いただきます」と答えた。本来ならばここまゝ理科室で解剖し、詳しく調べてから頭骨を取り出したいが、学者ではない私は頭部の解剖が苦手である。なんせ表情というものがあるでしょう、顔には……ね。皮をはぐと眼球とかが想像以上に不気味であることを以前ネズミの剥製を作ったときに経験しているし……。そこでこの頭部は大きな植木鉢の土の中に埋めて、肉や皮を微生物に分解させて骨格を取り出すという「無責任丸投げ方式」を採用することにした。夏を越して来年の春には頭骨が手に入る予定である。焦って早く掘るとエライことになるので決して急いではないけな。

ヌートリアは南米が原産である。1939年に軍隊用の毛皮を取るためにフランスから輸入したものが野生化し広がっているらしい。かれこれ80年以上日本に棲みついているのだ。巣をつくるために堤防に穴を開けたり農作物を食害したりするため、有害外来種に指定されている。

緊急速報！本日5月13日、中庭で子どものキツネが見つかった！

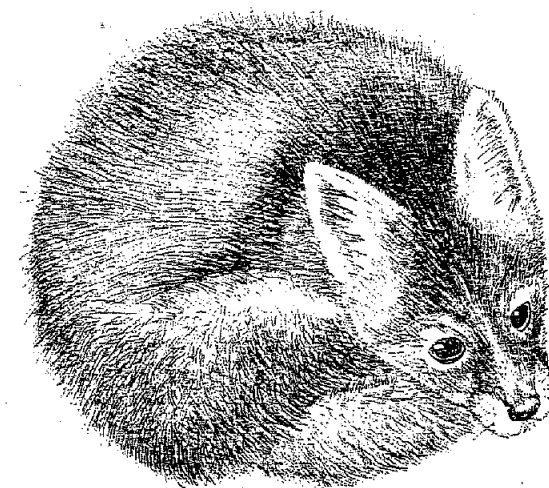
がんばれ！ 北っ子キツネ

5月11日、「9日に学校でキツネを目撃しました」と教頭先生から報告があった。昨年冬にはアライグマを目撃するなど、教頭先生にはネイチャーガイドの素質がある。その2日後の13日の朝、中庭でヌートリアの頭部が見つかった。そして、その日の午後には私もキツネを目撃した。初めは女性の先生方が東の渡り廊下横の溝で仔キツネを発見し「かわいい～」と萌えていた。なぜか逃げなかったので写真を撮ることができ、それを見せてもらった。「私も見たいもんだ」と渡り廊下周辺を幾度もうろつき、かわいい仔キツネが中庭の芝の上に寝転んでいるのを見つけた。人相の良くない男が来たので逃げてしまったが、その時仔キツネの右の後肢の足首から先（この部分を一般に足といい、足首から骨盤までの全体は動物では肢、昆虫では脚という場合が多い）が無くて、赤い断面が見えた。仔キツネは3本の肢でヒョコヒョコと走り去り、東の渡り廊下の溝のトンネルに隠れた。その後も何度か「ゴンはどうしているかな」と中庭を見ていると、再びキツネが見つかった。しかしそれはやや大きくて仔キツネではなかった。私に気付いてすばやく走って逃げたが、4本の肢がちゃんとついている。教頭先生が9日に目撃したのは、おそらくこのキツネであると思われる。仔キツネの親にしては小さく、先に生まれた姉だろう。キツネには、前年に生まれたメス（姉）がヘルパーとして母親の子育てを助けるという習性があるのだ。

ヌートリアの食いちぎられた頭部、足を失った仔キツネ、若いキツネ、この3つを中心に、私の曖昧な洞察力と年々鈍る観察力、そして動物に関する幅広い見識（思い込み）によって推察したキツネ親子の「波乱万丈ファミリーヒストリー」を紹介する。

瀬戸川のほとりに棲んでいたキツネの母には、年子の姉と弟の2匹の仔キツネがいた。ヌートリアやネズミ、魚を取ってひっそり暮らしていたが、川の改修工事で安住の地を追われ、一家は溝を伝って二見北小の中庭にたどり着いた。学校で捕れる獲物は限られているので、母キツネは夜に瀬戸川へ狩りに行き、獲物を仕留めて子どもに食わせるために運んでくる。こうして昼間は子どもを安全な学校に残し、母キツネは川へ獲物を借りに行く日々。そんなある日、学校に棲み着いていたアライグマが、母の留守を狙って仔キツネを襲い無残にも弟キツネの脚を食いちぎった。姉が必死に弟を守り命だけは助かった。空腹に耐え母を待つ姉と弟に残された食糧は昨夜母が啜ってきたヌートリアの頭だけ。そうとは知らず、翌日能天気な校長はその貴重な食料を「頭骨標本をつくったる♪」と無情にも土に埋めてしまった。薄幸の北っ子キツネたちにはどんな明日が待っているのか、次号あればうご期待。（森本レオ調で）

キツネは人間の住居地周辺の里山に生息し、播磨地域でもよく目撃される。私も加古川市の平荘湖の遊歩道で出会ったほか、交通事故死したキツネも2度見ている。タヌキ、キツネ、イタチ、ウサギなどの里山の獣たちはひっそりと、しかしたくましく生きている。



ホンドキツネ（イヌ科）

学名 *Vulpes vulpes japonica*

英名 Japanese Red Fox

日本には本州、四国、九州に棲むホンドキツネと北海道のキタキツネがいるが、共にアカキツネの亜種である。